

『シティ I』

1

字幕。

※ ※ ※

WATASHI

MADA

MEGA SAMETE INAI

KOTORI

NAITE INAI

NANI WO?

WATASHI SHIRANAI MAMA

KANTAN NA AISATSU MO

DEKINAI MAMA

KYÔ JA NAKUTE

SUBETE GA

TAIRA DE HEIWA DE

NANI MO NAI HIBI WO

SÔZÔ SASENAIDE KUDASAI

WATASHINI

SÔZÔ

SASENAIDE

KUDASAI

ONEGAI

ONEGAI

ONEGAI

※ ※ ※

2

雨。

弟がいる。

姉が来る。

姉「ああ、見つけた」

弟「……」

姉「見つけられてよかった」

弟「……」

姉「帰ってきたらどうなの？」

弟「……」

姉「帰っておいでよ」

弟「帰ったほうがいいかな」

姉「帰っておいでよ」

弟「そうするよ」

姉「うん」

弟「帰るよ」

姉「うん」

弟「……」

姉「……」

弟「少し待ってほしい」

姉「うん」

弟「そこで待っててほしい」

姉「待ってるよ」

弟「うん」

姉「弟は」

「私から生まれたわけではない。でも気づいたらそこにいた。私は弟ではない。弟は男だ。弟はお父さんには似てない。たくさんの日々と一緒にすごしてきた。私は自分の家の他に家族を知らない。私たちはもう十分成長した。もう背は伸びない。私は人よりも背が大きい」

「あれは冬の日のことだった」

「薄く雪が積もった朝に、私は犬を見た。犬は遠く離れていたけれど、私よりも大きく見えた。私はもしかしたら食べられてしまうんじゃないかと思った」

「実際は小さかった。私は食べられずに済んだ」

3

弟「急ブレーキをかけて、トラックが止まる。僕はヘッドライトを見つめている。わずかに距離がある。僕は死のうとしたのではなかった。僕はいままで死のうと思ったことはない」

「僕は電車を降りる」

「電車には慣れない。それでも生きるためにはたくさんの移動が必要だ。止まっただけでは都市は窒息してしまう。小さな街ほどそうだ。僕は汚い中華料理屋で餃子を食べる。テレビのニュースが小さな殺人を報道している。助かるべきだった人は助からない。空調が寒い。どこにでも風は吹いてくる。僕は夜の空を見上げるといつも思う。たくさんの鳥が覆いつくしている」

「少し路地を入れれば全く灯りが無い。音も聞こえなくなったような気がする。みんなシャッターを閉めてしまった。誰かが煙草を吸うのが、昔の汽車が上げる火花みたいに、夜の別世界の入り口に思える。この道は一步一步が少しずつ遠い。どれだけ歩いても、どこにもたどりつかない」

「いずれこの道は誰かがきれいにしてしまう。それは運命みたいにこの街に下りている」

「明るい夢を見なさいと言われる。僕の夢は明るいだろうか」

「誰が明るいと言えるだろうか」

4

食卓。

姉「いんげんまめだよ。にんげんまめじゃないよ」

弟「(ごはんを食べている) お酢を入れすぎだよ」

姉「体にいいんだよ」

弟「体はいいよ」

姉「私よりも長生きをきなさい」

弟「お腹がすいた」

姉「食べてるじゃないの」

弟「お腹がすいたんだよ」

姉「だから、食べてるじゃないの」

弟「砂利を噛んでみたいだ」

姉「あさりね」

弟「うん」

姉「私たちが潮干狩りで採ってきたあさり」

弟「うん」

姉「嘘だよ。潮干狩りなんて、行ってないでしょ？」

弟「僕は行きたかった」

姉「私の友達が、海へ行ったんだって」

弟「うん」

姉「誰か、知らないひとと」

弟「うん」

姉「何で知らないひとと海なんかに行っちゃうんだろう」

弟「わかるよ」

姉「わかるか」

弟「明日、出かけようと思う」

姉「どこに？」

弟「決めてないけど」

姉「そう」

弟「あまり遠くじゃないよ」

姉「そうね」

弟「ごちそうさま」

姉「おそまつさま」

弟「ねえ、何か欲しいものある？」

姉「欲しいものか」

弟「うん」

姉「名声」

弟「名声か」

姉「あと権力」

弟「権力」

姉「あんたは？」

弟「愛情とか」

姉「大事ね」

弟「語学力とか」

姉「それも大事ね」

弟「ちゃんとするから」

姉「うん」

弟「ちゃんとするからね」

5

嵐の荒野。

姉「あんたはいつも頼りにならない！」

弟「え？」

姉「あんたはいつも頼りにならない！」

弟「ごめん、聞こえない」

姉「あんたはいったい何になりたいの？」

弟「聞こえない」

姉「私はいったいどうすればいいの？」

弟「ごめん、何を言っているのかさっぱりわからない」

6

姉「(目を覚まして) ……お風呂はいんなきゃ」

「お父さんの夢をみた。お父さんのことを思い出すのは久しぶりだった」

「お父さんと私は道路を歩いていた。片側には海があった」

「成長して悪いことはないよね」

「お父さんが言った」

「私はしゃべらなかつた」

「私は、かつて、夢でしゃべったことが、あつただろうか」

「赤い、海も、空も」

「私はその道が外国へ通じているのを知っていた」

7

弟「お父さんの話はやめようよ」

姉「だって、夢に見たんだよ」

弟「よく顔を覚えているね」

姉「覚えてないよ」

弟「うん」

姉「お父さんのこと、嫌い？」

弟「嫌いじゃないよ」

姉「うん」

弟「でも、お父さんの話をするのは、好きじゃないんだよ」

姉「うん」

弟「僕もいつか、お父さんのところで働くことになるのかもしれない」

姉「ならないよ」

弟「なるかもしれないよ」

姉「ならないよ、きっと」

弟「でも、なるかもしれないよ」

姉「うん」

弟「今はまだ、幸せだよ」

姉「うん」

8

姉「みんなのお父さんは、お母さんは、何の仕事をしているの。と、先生が言う」

「私はとても答えづらい」

「子供の私は、お父さんの仕事は、よくわかっていない」

「でも、なんだか、嫌な気分がする」

弟「嫌な気分がするな」

姉「どうしたの」

弟「へんなものでも食べたかな」

姉「早く寝なさい」

弟「そうするよ」

姉「バファリン食べる？」

弟「たぶん違うと思うよ」

姉「欲しかったら言ってね、バファリン」

弟「うん、ありがとう」

姉「明日早いの？」

弟「早くないよ」

姉「わかった、おやすみ」

弟「おやすみ」

姉「お父さんは、お金がない、貧しい人たちに、仕事を紹介する仕事をしていた」

「とても危険な仕事を」

「死んじゃうこともある危ない仕事を」

「海の向こうの」

「ずっと戦争をしているあの国で」

9

字幕。

※ ※ ※

WATASHI WA HIBI WO

KASANETE IKU

TSUMARANAI TO IU

MONKU WA IWANAI

KOTONI KIMETA

MUKASHI

WATASHI WA IRON-NA

KOTO WO KANGAETE



ITANO DATTA

※ ※ ※

1 0

弟は走っている。

弟「走っている」

「その間」

「僕は思い出さない」

「僕は興味を示さない。何も欲しがることはない。僕の飼っていた犬は十歳のときに死んだ。友達からもらったキーホルダーをまだ持っている。隣の家の車が少しずつ古びていく。僕はこの生まれ育った町を、まるで抜け殻のように考える。大きな抜け殻が、夕陽に照らされている。少し気味が悪くて、でも乾いている。その生き物は、魚のようでもあるし、蛇のようでもある。抜け殻の主は、もうとっくに、遠く、空の向こうへ飛んでいってしまった」

1 1

明るいが、そこは廃墟。

弟「みんな元気？」

ガラクタ 1 「元気元気」

ガラクタ 2 「なにも変わらないよ、こんな所じゃ」

弟「うん、僕もちょうどそう思っていたよ」

ガラクタ 3 「何か飲んだり食べたりしている？」

弟「うん、たぶんね」

ガラクタ 2 「それはいいことだね」

弟「みんな、僕は成長してしまったな」

ガラクタ 1 「気にすることはないよ」

弟「ありがとう」

ガラクタ 3 「人間は生きていればいいことがあるよ」

弟「ありがとう。ねえ、僕は時々、自分が透明のような、透明のまま濁っているような、そんな気分になることがあるよ。そういうとき、昔のことはまるで嘘みたいに思える。僕はそのまま生きていて、立派な人間になれるだろうか？ 僕は街へ行行って、一人で生活したい。僕は自由がほしい。でも勘違いしないでほしい。自由なんて本当は存在しない。でも、僕は楽しいときに楽しいと言えるだけの自由がほしいんだ。わかった？」

「話を聞いてくれてありがとう。またそのうちに来るよ」

姉「こんなところにいたのね」

弟「憶えてる？ ここは昔は汚いショッピングセンターだった。小さなゲームコーナーがあって、不良たちのたまり場だった。僕も一度だけカツアゲされたことがある。近寄ってはいけない場所だった。それでも人はそれなりに集まった。そのあと、どこかが買収して、きれいなファッションビルに変わった。ここはとても明るくなった。しかし人はいなくなった。きれいで真っ白なまま、ここは廃墟になった。そのへんにあるガラクタを、誰も片付けられない」

姉「私はあまりここに来たことがない。弟と私はずいぶん違う。弟が自転車でどこかに行ってしまうたび、私は中国の歴史のことを考えていた。マンガを描いたり、チョコレートを食べたりしていた。チョコレート。私チョコレート好きだった」

弟「憶えてる？」

姉「憶えてるよ」

弟「色んなものが変わってしまった」

姉「うん」

弟「でも、変われば変わるほど、物事は停滞していくんだ」

姉「うん」

弟「僕は停滞しないためには動かないといけない、そんな気がしてしょうがないんだ」

姉「でもお金がないのね」

弟「お金は、ないね」

姉「私は少しは働いている。こんな世の中で働いていられるのだから、ありがたいことだと思う。でも少しだけだから、そんなにお金はない。私は私の道徳観が満足する程度生きていられればいい。私は自分の将来をぼんやり眺めていたい。眺めていられるのは幸せなことだから」

弟「でも僕は悲観していない。きっとお金はどこかからやってくる」

姉「私、もっと働けば元気になるのかな」

弟「こないだ、この上に映画館があるのを見つけたんだよ。何もやっていないけど。行ってみる？」

姉「行ってみる」

映画。

弟が姉を追い詰める。

弟「やっと追い詰めたぞ」

「ベイビー」

「さあ、それをこっちによこすんだ」

姉「私、このままじゃいけないと思うの」

弟「僕が一体何をしたって言うんだ？」

「墜落する！」

姉「はい、こちらヒューストン」

弟「大変だ、とんでもないことになっちゃった」

「犯人はあなたですね？」

姉「(歌う) クラームエーブリヤーマー」

弟「ちがうんだ、ハニー、信じてくれ」

姉「バラの……つぼみ…… (死ぬ)」

弟「恐怖だ！ 恐怖だ！」

13

映画館。

弟「映画って、行ったことあったっけ？」

姉「昔はあったんじゃない」

弟「僕はあまり映画を知らない」

姉「図書館で借りて観てたよ」

弟「売店にパンフレットが残っていて、『アキラ』があったよ、実写の」

姉「私あのアニメあまり好きじゃない」

弟「何を観てた？」

姉「ジョーズとか」

弟「恐竜のやつ？」

姉「うん」

弟「そうか」

姉「あとベイブとか」

弟「人を殺すやつ」

姉「そう」

弟「たくさん観たんだね」

姉「たくさん観てたよ」

弟「映画館って、少し怖い」

姉「私は怖いと思ったことはない」

弟「僕」

「ちいさいころ」

「映画館で泣いていた。大声をあげて。何が怖かったんだろう。ずっと泣いていた。本当はすぐ外に出されたんだと思う。でも長い間泣いていたような気がする。ずいぶん長い間」

姉「覚えてない」

弟「映画館はちょっと怖い」

14

弟「あっ、映画が始まった」

字幕。

※ ※ ※

ARUHI KARA

WATAKUSHI NO NAKA NI

KOTOBANI DEKINAI

ÎYÔ NO NAI

KURUSHIMI GA

KIKOETE KITA

SÔSHITE

WATAKUSHI WA

KURAYAMI NI TSUITE

KANGAETA

※ ※ ※

沈黙。

弟、拍手をする。

1 5

姉「今日はいつまでも今日だ」

「退屈していても」

「苦しんでいても」

「私が悩んでいるぶんだけ、地球は廻る努力をやめる」

「私、昔から、夢を見るように歩いていたと思っていた。歩いているのが私は好きです。歩いている間は、何にもならないから、でも、怒られないから、好きです。私、よく人に怒られるから、せめて夢を見るのは、自由でいたい。どこまで歩くでしょうか。ここから。私は、弟がいつまでも元気でいられるようにと、祈っています」

1 6

夜道を歩いている姉と弟。

弟「まるで姉弟みたいだ」

姉「うん、まるで姉弟みたい」

弟「いつか、僕が、牢屋に入ったら、出してくれよ」

姉「うん」

弟「いいかい、星が見えるだろう、あれが僕の星だ。あれは僕のものなんだ。この間そう決めた。死んだらあそこに行くことにした。行く方法はまだ考えてない。君もそうしたらいいよ。夢があるのはいいことだよ。星は、そのまま、夢って意味だろう。空いっぱい星ってというのは、それだけたくさんの夢ってことだろう」

姉「星は、北の空にはたくさん見える。南の空はぼんやり明るくて、星が見えない。あそこには街があるから。車なら一時間もかからない。近いけれど、何があるのか、私はあまりよく知らない」

弟「暗がりが好きなんだ。誰かが助けてくれる感じがする。僕は結局、誰かがいないと駄目なんだ」

姉「寝たくない夜が来て、寝ないでも怒られなくて、ずっと起きている。星も見る。夜はやさしい。何も悪いことをしない。私は、時間は区切ることが、できないから、規則正しい生活なんて嘘だと思う。何時であっても、寝てなくても、ご飯食べてなくても、私は私だし、世界は世界だし、生きてる。何時でも私は生きてる」

弟「生きてるね」

姉「生きてるよ」

弟「生きてるうちに、きっと素晴らしいことがたくさんある。それはたくさんありすぎて、終わりが見えない。でも本当は終わりはある。それを食べながら生きているね。いつ終わるかわからないけど、しばらくは終わらないから、遠慮しないでいるよ」

姉「私はそんな風には言い切れない」

弟「こうだと決めつけるんだよ、人生を。そうすれば、ぐっと生きやすくなるよ」

姉「努力してみよう」

弟「言葉は信用できるよ。本心じゃなくてもいいから、何か言葉にしてみるんだよ。そうすれば何か起きるから」

姉「あなたはどこで言葉を勉強してきたの？」

弟「僕たち、こんな風に喋りながら歩いたこと、あったかな」

姉「あったよ」

弟「あったかな」

姉「これからどこへ行くの」

弟「家だよ。でも僕は、どこでも家だと思ってる」

姉「お金がほしいんだね」

弟「なんとかなるよ」

姉「働いたらどうなの」

弟「どこで？」

姉「わからないけど」

弟「外国とか」

姉「そんなつもりじゃないよ」

弟「外国行ったら、死んじゃうかな」

姉「死んじゃう人もいるでしょ」

弟「うん」

姉「この国でだって、死んじゃう人もいるよ」

弟「いるね」

姉「鉄砲って痛いのかな」

弟「痛くないといいよね」

姉「うん」

17

姉「家に帰ると、留守番電話が入っていて、内容は、お父さんが隣の国で、鉄砲に当たったというものだった。お父さんの骨はちゃんと帰ってきた。ちゃんと帰ってくるんだな、すごいな、と思った。私だったら、帰ってくるだろうか。私は今まで、どこかから帰ってきたことがあるだろうか」

弟「半年が過ぎた。僕は街について色々知った。古い二階建てのアパートのベランダで、日が沈むのを眺めていると、誰かが知らない楽器を練習している。遺産はまだたくさん残っているから、僕はたぶん自由だって言えるんだろう。一日のたいていは歩いて過ごす。姉とはしばらく会っていない。たぶん元気なんだろう」

18

舞台空白。

19

弟が走りこんでくる。

弟「僕は誰だ？ 誰でしょう。タクシーの列に聞けば答えてくれるか。海なんていつでも行ける。ここで寝ていようか」

「僕の感覚はいったい誰のものか。昨日はお酒をたくさん飲んだ。僕の血液。僕の血液が音をたてる。この街はいつも静かだ。今度自転車を買おう」

「苦しいのと悲しいのとどっちがいいだろう。僕は悲しさに耐えることはできるだろうか。最近何が悲しかったらうか」

「図書館でよく本を読む。この間読んだ本にはこんなことが書いてあった」

「『戸がぼくを迎え入れるとき敷居の上でもういちど軋む前に、夕食の支度のしてある台所のテーブルをもういちど見る前に、ぼくはひざまずいて告解しなければならぬ。それはすこぶる簡単なことだ。』」

「この世には物理的に存在しない時間が存在している。でも皆それを当たり前前に生きている」

「何が」

「他人と僕を分けているんだろう」

「僕が心の底から信じていることがあるとすれば、それは他人が僕ではないということだ。僕はもしかしたら他人かもしれない。でも君は絶対、僕じゃない」

「誰が僕なもんか」

「僕は何の権利ももっていないでこの街に住んでいる。どうせいつか出て行く。僕はここでは幽霊だ。幽霊は手を伸ばす。人間に向かって伸ばす。心臓は透明だ。僕には中身しかない」

「僕の体は死んだら溶けると思う」

20

姉がいる。

姉「毎日はゆっくり流れている。大きな蛇がいて、一日一日をゆっくり消化するみたいに。私は手帳をもっている。でも昨日なくしてしまった。私はさようならを唱えるしかない」

「私、弟にさようならって言ったっけ」

「昨日は友達に会っていた。久しぶりに。友達の家でコーヒーを飲んだ。私はあまりコーヒーは飲まない。夜の帰り道、人工衛星が私を見ている。私はこんなところで、退屈していて、何にもしていない。私は苦しいことはしたくない」

「なにもかもがうまくいきますように」

「全部を簡単に整理して、一から十までの数字をふって、少しだけ満足していただけるような明日がくれればいいな」



電車の中。

弟「期待してない！ 僕は、暗がりで待っている。何かを信じている。それが何かはわからない。あなた、どこかで会ったことがありますか？ （返事がない）僕のために、たくさんの人たちが死んでいった。そんな想像は、僕の胸をいっぱいにする。電車は走るけど、意味がない。僕の乗る電車は人を殺さない。知ってましたか？ （返事がない）うん。その通り。みんなが正しい。この世に間違いは存在しない。世界は正しさでできている。電車は正しさに向かって走る。あなたはどこまで行くんですか？」

姉「中央通り駅まで」

弟「この街は誰が作ったんだろう。渋沢栄一さん？ それと、前島密さん？ きっとそうだ。神様について僕たちはもう知っている」

姉「多くのことを私たちは学んできた。正しさを、私たちは分からなかった。弱い脳細胞で、がんばって理解しようとしてきた。私たちは時々疲れる。疲れて、寝て、起きる。日本史はたぶん夢だった。私たちは、地面の下に夢を押しこんだ。だから私たちの国は、しばしば揺れる。ときどき、すごく大きく揺れる」

弟「がんばろう。僕たちは。いつも電車に乗ろう。希望については読んだことがある。今日何をしようか、僕は考えている」

学校。

弟「先生！ 大変です。宿題が終わりません」

姉「それはいけません、あなたたちの数すくない義務なのですから」

弟「先生。居残りをしてもいいでしょうか」

姉「駄目です。宿題は家でやらなくては」

弟「でも先生、終わらないのです」

姉「家でやらなくては宿題ではないのです」

弟「でも先生、どうしたらいいのかわからないのです」

姉「あなたには家があるのでしょうか？ 家があるというのは、いいことなのです。あなたは家を大事にしなくてはなりません。宿題があなたを、学校と、家とを、つなぎとめるのです」

弟「先生、理屈がわかりません」

姉「理屈を学ぶのが学校なのです」

弟「僕にはわからない理屈がたくさんある」

姉「学ぶのには長い時間が必要なのです」

弟「気が遠くなる」

姉「遠さに耐えられるだけのメンタルを身につけましょう」

弟「僕は生きていけるだろうか」

姉「まず宿題をやりなさい。話はそれからです」

弟「僕は先生の言うことがよくわからない」

姉「あなたは人の話をちゃんと聞かなくてはいけない」

弟「はい」

姉「そして理解しなくてはいけない。あなたは少し世界を甘くみている。世界の人たちが、少なくとも自分程度には頭が悪いだろうと思っている。自分には最後まで生きていられるだけの体力があると信じている。でもそれらはすべて幻想です」

弟「僕、宿題やります」

姉「いいでしょう。さあ、家に帰りなさい」

弟「ええ、でも」

姉「どうしたのですか」

弟「僕はまだ家に帰りたくない」

姉「なぜですか」

弟「なぜだかわからないけど」

姉「気分の問題ですか」

弟「そういう気分なんです」

姉「仕方がないですね。私についてきなさい（歩きだす）」

弟「どこへ行くのですか」

姉「屋上です」

弟「でも、屋上は行ってはいけません」

姉「特別です」

弟「特別だと不安になります」

姉「不安の材料を見つければ切りがないのです。地球が太陽の周りを回っているのだから、不安がろうと思えば不安がれるのです。さあ、着きましたよ」

弟「これが僕の街ですか」

姉「私たちの街です」

弟「誰かの描いた絵みたいだ」

姉「きっと誰かの描いた絵でしょう」

弟「人間がない」

姉「そうです。ある程度距離をおくと、人間はいなくなります」

弟「僕もそうですか」

姉「あなたも、離れればいなくなります」

弟「いつか授業でやりますか」

姉「はい、いつか」

弟「ぼくはいなくなりたい」

姉「みんなそう思います」

弟「そうしていなくなるんですね」

姉「はい」

弟「あれは僕の家ですか」

姉「そう思いますか？」

弟「そう思います」

姉「一人で帰れますか」

弟「やってみます」

姉「ではさようなら。明日にはこれも夢だったと気づくでしょう」

23

姉「夢だった。どこから夢だっただろうか」

「私は想像します。みんなが努力している」

「私が名前を知っている人。存在を認めている人。それはたとえば、私の娘。私には娘なんていない。でも存在していることを知っている。ただ産めばいいだけ。私は娘がそこに寝ていることを想像する。私はここが自分の家だと知っている。私の生まれたときの家。もう存在していない家。建て替える前の家。ここには順番がない。それは自由と言えるだろうか」

「自由なんてもの私は知らない」

「私は夢をみていました。今は想像しています。旅立つ日のことを考えます。私は前を見ることにしているので、後悔することはないでしょう。空の広い場所が好きです。昨日から明日へ、まっすぐ続いているから。あなたは私ではない。私はここに立っている。風景を眺めている。誰かがここへ歩いてくればいい。私は立っているから」

「右と左は地球から見たら逆になります。遠さと近さもそうです。これは私が発見したことです。地球だけが特別なんだと思います。どうして兄弟なんかが生まれるんだろう。私は今日何をしよう。違ってしまいたい。明日も違ってしまいたい。選べるものは選びたい。私の言葉は聞こえない。聞こえなくてもそれでいいけど」

24

弟「日常が長い。僕はいずれ飽きるだろうと思う。もう飽きているのかもしれない。冬が来ると僕は元気だ。小銭で買えるコーヒーが好きだ。図書館はもう閉まっている。僕は何かするべきことがあるだろうか」

姉「何もないよ、あなたには」

弟「それならいいんだ、べつに」

姉「何もないよ、ここには。未来は誰かが頑張って作らなきゃならない。誰が頑張るの？ 誰が私たちを知っているの？ 今日あなたは何をしたの？」

弟「僕は何をするべきだったんだろうか」

姉「いつか冬が来る前に、片付けを終えなくちゃ。私はいろんなものに名前をつけなくちゃ。自転車に乗って。町は私には広い。朝の時間に、私は何もできない」

弟「虫歯が少しづつ痛くなる。部屋がきたなくなっていく。僕は今日もたくさん歩いた。僕は何も見つけなかった」

姉「多くのものを見つけないと。そのぶんどけきつと私はよくなる」

弟「姉に会いたいだろうか、僕は」

姉「いつもの猫は今日はいなかった」

弟「ずっとこんな日々は続かない！」

姉「絵でも描こうかな」

弟「終わってしまうことがとても多い！」

姉「体をうごかさないと」

弟「生きてなきゃいけない！」

姉「体に油をささないよ」

弟「生きていなくっちゃ！」

姉「肯定するの？」

弟「そうです！」

姉「そうですか」

弟「そうです！」

姉「よかったです」

25

字幕。

※ ※ ※

もう一度大きな地震があり、その後、この国は隣の国と小規模な武力衝突をした。

その戦闘では合計で 13 人が死亡した。民間人の死傷者はなかった。

この国では、その事件が戦争と呼ばれることはなかった。

何かが終わったような空気がこの国を包んでいった。

その後、都市からは人の姿が消えていった。

もう都市には誰もいない。

地上にも地下にもいない。

生活の跡もない。

しかし都市は滅びることはない。都市は都市としてそこに存在している。

都市は過去を思い出す。

そこに存在していた姉弟の声を思い出している。

※ ※ ※

26

雨。

姉「ああ、見つけた」

弟「……」

姉「見つけられてよかった」

弟「……」

姉「帰ってきたらどうなの？」

弟「……」

姉「帰っておいでよ」

弟「帰ったほうがいいかな」

姉「帰っておいでよ」

弟「そうするよ」

姉「うん」

弟「帰るよ」

姉「うん」

弟「……」

姉「……」

弟「少し待ってほしい」

姉「うん」

弟「そこで待っててほしい」

姉「待ってるよ」

弟「うん」

雨音。

姉「何を見ているの？」

弟「大きなもの」

姉「そうか」

弟「それはすごく大きい」

姉「帰ろう」

弟「うん」

27

食卓。

姉「おいしい」

弟「おいしい」

姉「おいしい」

弟「おいしい」

姉「おいしい」

弟「おいしい」

姉「さようなら世界」

弟「きっと大丈夫」

姉「さようなら」

弟「健康」

姉「けん……」

弟「自由」

姉「じ……」

弟「じ？」

姉「あ……」

弟「あ……」

姉「く……」

弟「きょう……」

姉「は……」

弟「え……」

姉「さん……」

弟「と……」

姉「く……」

弟「ゆ……」

姉「こ……」

弟「ん……」

姉「い……」

弟「た……」

姉「え……」

弟「た……」

姉「お……」

弟「だいま」

姉「かえり」

幕。

作:カゲヤマ气象台(円盤に乗る派)

本戯曲は京都芸術センターが著作者より許諾を得て公開しています。  
作品の全部もしくは一部を、著作者に許可なく転載することを禁じます。  
本戯曲を上演するなど、使用を希望する場合には、著作者までお問い合わせください。

京都芸術センター <http://kac.or.jp/>